

特集：2013年「オーディオ・ホームシアター展」より

「体験ライブレコーディング」報告

録音機器・技術普及委員会主査

岩出 和美

1. 体験ライブレコーディングについて

今年の生録ワーキンググループの大きな活動は、2013年オーディオ・ホームシアター展「音展」における、ライブレコーディング体験会であった。そして、ベテラン参加者に向けたミニ生録会を年末に行っている。ここではその概要をご報告しておく。

まずはこれらのイベントの主催となる、日本オーディオ協会の生録ワーキンググループの活動について説明しておこう。

日本オーディオ協会の仕事は幅広い。一般のオーディオメーカー間の情報交換はもとより、歴史やプロ部門、特に放送やスタジオにおけるレコーディングについても、研究やデータの蓄積を行っている。近年その一環として、力を入れているのが生録である。

急速なデジタル技術の進歩が、従来の録音機とICレコーダーを融合させ、高密度な音質を実現できる、小型でハンディ・デジタルレコーダーを頻出させている。それらを使うことにより、会話、楽器のお稽古、コンサートやライブ等を、PCMのCDグレードはもとより96kHz/24ビット、192kHz/24ビットといった極めて高解像度で録音できるようになった。さらにDSD方式で録音できるモデルも登場し、PCMとはまたひと味違った高解像度な録音を可能にしている。

本ワーキンググループは、それらのハードを供給するメーカーと協会が一体となり、廃れて久しい生録を、新しい次元で再度、提案していく目的で組織されている。

往時の生録は、録音できることの驚きや、高音質ソフトへの欲求、そして高精度な複製といった目的で大ブームとなった。その後CDの登場を受けて、高音質ソフトの入手しやすさや、PCの普及によりデジタルオーディオがお手軽になったことで、一般のオーディオファンにとって録音は疎遠な物となっていた。ただし、お稽古系の方、楽器演奏系の方、さらには自然音を含めた生録オーディオファンは別であった。これらの方たちが、ハンディ・デジタルレコーダーに目をつけ、話題となり、ICレコーダーとは方向性の違った、一つのジャンルを形成するまでになっている。

本ワーキンググループでは、録音会を通して録音の楽しさの啓発、用途提案等を一般のファンへアピールしている。さらにもう一つ、極めてニアコールな音質を実現できるデジタルオーディオならではの問題、著作権等の問題に対するケアや録音マナー向上など、健全なマーケット育成もこころがけているのだ。

この生録会は「体験ライブレコーディング」といったタイトルの下、第1回目のパシフィコ横浜「AVフェスタ」以来、7回開催してきた。多くは「音展」の会場での開催であるが、小規模の開催として、ライブハウスや、後述するが、松本記念音楽迎賓会でも開催している。

2. 第8回オーディオ・ホームシアター展「生録体験会」

若手弦楽カルテットによるアコースティックなポップクラシックを録音

今年の音展での出し物は「カルテット・クローデル」による弦楽四重奏の生録音であった。内容は若手女性ミュージシャンによるユニットで、軽クラシックからジャズ、そしてポップミュージックまでの楽しい演奏を、PAを通さない、すべて生音での録音である。

開催場所はオーディオ・ホームシアター展「音展」会場、タイム24ビルのイベントホールである。ご存知のように、この「音展」、昨年秋葉原から、お台場のテレコムセンターに開催場所を移している。日時は、10月20日午後2時～3時の1回公演だ。

生録会の協賛メーカーはオリンパス、コルグ、ズーム、ソニー、タスカムといった録音機メーカー各社。

今回の生録参加者は約60名。録音機持参の方と、協賛メーカー提供の貸し出し機使用が、大体半々であった。リスナー参加を合わせると、200名のホールキャパが、満員になるほどの盛況であった。参加者それぞれが、自前あるいは貸し出しのポータブルデジタル録音機で、ハイレゾの、ほとんど付加要素を加えない状態で、演奏を録音できるわけで、極めて新鮮な音が手に入ったことになる。貴重な企画といえるのではないだろうか。

なお、記録録音はオーディオ評論家の石田善之氏が担当、あわせて簡単な録音テクニックや、弦楽四重奏のポイントもレクチャーしている。この記録音源の一部は、ハイレゾ配信サイト e-onkyo music が、各種 PCM フォーマットと DSD で、無料ダウンロードサービスを行っているので、ご興味をもたれた方は、是非アクセスして欲しい。

<http://www.e-onkyo.com/music/album/oto2013/>

当日の演奏曲目と記録録音機器は以下の通り。

- ① アイネ・クライネ・ナハトムジーク（モーツァルト）
- ② JAZZ メドレー：A列車で行こう（ビリー・ストレイホーン）、他
- ③ Three Irish Traditions
- ④ つか夢で（眠れる森の美女）より（チャイコフスキー）
- ⑤ 80日間世界一周（ビクター・ヤング）
- ⑥ プリンク・プランク・プリंक（ルロイ・アンダーソン）
- ⑦ ソーラン節
- ⑧ 世界の約束（ハウルの動く城）より（木村 弓）
- ⑨ 宇宙戦艦ヤマト（宮川 泰）
- ⑩ オリジナル曲
- ⑪ ラ・クンパルシータ（ヘラルド・エルナン・マトス）
- ⑫ ポル・ウナ・カベサ（カルロス・ガルデル）
- ⑬ 坂本 九メドレー：明日があるさ（中村 八大）、見上げてごらん夜の星を（いずみ たく）、上を向いて歩こう（中村 八大）
- ⑭ ラデッキー行進曲（ヨハン・シュトラウス）

- ・ レコーダー (DA/AD コンバーター) : TASCAM DA-3000 2台
- ・ レコーダー : TASCAM DV-RA1000HD 2台
- ・ モニターヘッドホン : Beyer dynamic 2台
- ・ マイクロホン : ステレオマイク B&K 4006、オーディオテクニカ AT5040



「カルテット・クローデル」と石田 善之氏



参加者に講演する石田 善之氏

3. 第9回松本記念音楽迎賓館「生録会」 クリスタルで暖かい、チェンバロ演奏を録音 さらにハイレゾ/DSD を配信音源で楽しめる

さてもう一つ生録会の報告。第9回目が、12月1日、松本記念音楽迎賓館で開催された。こちらは筋金入りの生録ファンに向けての企画。「音展」の規模だとスペース的問題で制約される、別付けマイクを使った録音をしたいという声に応えたもの。

演目はチェンバリスト石川陽子さんによるバッハ等の演奏である。この会は単に生録会だけではなく、主催者側の録音として、石田善之氏が担当し、この録音音源を、ハイレゾ配信サイト、e-onkyo music で配信するというユニークな企画である。つまり一般の方でも当日の生々しい演奏をダウンロードして楽しめる仕掛け。もちろん生録会参加者は、ご自分の録音と、石田氏の各種フォーマット録音の音の差を体験できるので、楽しみは多い。ただし石田氏の録音は、参加者によって音の吸われることのない、音楽迎賓館ならではの響きを生かすために、録音会前に収録されている。

配信音源は「輝くチェンバロ」というタイトルで、DSD 5.6 MHz という最高品位から PCM の 192kHz/24 ビット、96kHz/24 ビットといったハイレゾ版も用意される。それぞれのフォーマットの音質比較もできるので、オーディオの醍醐味を堪能できるだろう。



チェンバリスト石川 陽子氏



松本記念音楽迎賓館での生録会の様子

筆者プロフィール 岩出 和美 (いわいで かずみ)

1950年12月東京高田馬場生まれ。フランス文学を学ぶも、オーディオ誌に就職。以後オーディオ誌の編集に携わる。現在は音楽之友社発行、「月刊 Stereo」誌編集長。中学、高校、大学とヤマヤマであったが、現在の趣味は音楽を聴くことと本を読むこと。